

藤田浩子の 少し昔のこと 〈65〉

おむつはずし

私が子育てをしていた頃、おむつは浴衣のお古などで作りました。おむつカバーは目の詰まったような古いセーターで作りましたが、いくら目が詰まっているといっても、大量のオシッコは無理なので、1回ごとにカバーも替えていました。負んぶしているときにされると、私の服まで濡れてしまいましたから、お出かけのときには蒸れてかわいそうでしたが、もれないゴムのカバーを使いました。そんな事情もあったからでしょうか、たいていの親は1歳過ぎるとおむつをはすすことを考えました。首がしっかりしてきたころから、朝起きたときにおむつが濡れていなければ、庭に向かって足を広げてやれば、必ず出ました。ときには「シー、シー」と誘うように声もかけましたが赤ん坊だって広げてやれば気持ちがいいのでしょうね、おむつにやってびちょびちょになるよ



り気持ちがいいとわかっていたのです。昼間でもそろそろかなという頃に広げてやれば、出しました。子どもがおむつをしているときには、いつも頭の片隅に子どものオシッコの時間があったように思います。

今はおむつも高性能になって、2回3回分でも漏れることなく貯めてくれますから、親もつい安心してしまおうのでしょうね、朝、目覚めたら必ず広げるという習慣もなくなってしまったようです。

おむつをはすすことに親が振り回されないようにという配慮でしょうか、今は保健所でも「トイトリは無理しないで」とお母さんたちに伝えているようです。

おむつをはすすということは、おむつ代を節約するためではありません。親の手間をはぶくためでもありません。子どもの自立をうながすことです。子どもが、自分の体を、自分でコントロールする第一歩です。

リレー連載 <198>

わたしの大好きな絵本

日比谷伸子

『おはなしおはなし』

作：ゲイル・E・ヘイリー

訳：あしのあき

ほるぷ出版

私の所属する「おはなしおはなしグーチョキパー」の名前のいわれとなったのが、この「おはなしおはなし」という絵本です。世界中どこにもひとつもお話のなかった昔、クモ男アナンセはクモの糸のはしごをあんで空にのぼり、空の王者ニヤメが持っているお話を買い取ろうと交渉します。すると、

<がっぷりかみま>のオセボ・ヒョウ、<チックリさしま>のムンボロ・クマンバチ、<コッソリいたずらま>のモアチアようせいを持ってこいというニヤメの難題。

アナンセはいったいどうするか？ アフリカの昔を思わせる美しい木版画と語り口に惹きつけられます。

アナンセが持ち帰った箱いっぱいのお話は、世界のすみずみに飛び散っていきます。そんなお話をひとつひとつ拾い集めて、子どもたちに伝えたいと私たちの先輩は活動を始めた。だから、ちょっと長い「おはなしおはなしグーチョキパー」という名前なんじゃよ。

